

# 日本近世の境界紛争に関する史料調査と実地踏査

——長州藩における第二期元禄国絵図作成事業の実施に関する覚書

鈴木 雅

日本史学専門 博士後期課程 2年

## はじめに

日本近世史を専攻する筆者は、これまで主に美濃国をフィールドとして境界をめぐる紛争を取り上げ、その分析を通じて近世の国家と社会の関係について考察を進めてきた。

美濃地域については、近世史料が豊富に伝来しているため、この地域に対象を設定して継続的に分析を進めていくことで、手堅い成果が挙げられるはずである。しかしその一方で、単一の地域に的を絞ることにより、分析視角などが無自覚のうちにその地域の特質に規定されてしまう恐れもある。したがって、美濃以

外の地域についても目を配り、自らの研究対象を相対化させていくことが望ましい。

そこで今回のプロジェクトでは、筆者が普段調査することのできない遠方の地域について史料を調査・分析し、美濃におけるこれまでの成果と比較することで、新しい視点を獲得することを目指した。具体的には、長州藩における元禄国絵図作成事業の実施過程と、長州藩と広島藩の境目を流れる小瀬川（図、写真1）をめぐる紛争について調査を行い、筆者がこれまで分析してきた美濃の事例と比較する。

## I 元禄国絵図作成事業とは

国絵図とは、前近代日本の地域区分たる「国」を一国ごとに描いた巨大な絵図である。江戸幕府はこの国絵図を正保・元禄・天保など数次にわたり作成したが<sup>1)</sup>、その中でも本稿で扱う元禄国絵図は、国境争論を防止するため、国境について詳細な記述を有するという特徴を持つことで知られている<sup>2)</sup>。

この元禄国絵図作成事業は、元禄9（1696）年11月23日に將軍綱吉の命を受け、翌年閏2月から開始された。同年4月には各国の担当藩が任命され、それら国絵図担当藩が幕府の指示を受けつつ国ごとに絵図を取りまとめ、元禄15年に国絵図全ての提出が完了している。

杉本史子はこの過程を、元禄12年10月前後を境として第一期・第二期に区分した。「第一期には、領主などを対象として国郡論所調査、絵図面上での国境確定がその作業内容であったのに対し、第二期にはそれに加えて、国境証文とあらたな内容を持った小書が要請された」からである<sup>3)</sup>。

第二期の特徴として挙げられている「国境証文」は「百姓証文」とも呼ばれ、国境を挟む両国の村落から国境に関する情報を記して国絵図担当藩に宛てて連名で提出された証文のことを指す<sup>4)</sup>。国境について百姓から直接に証文を徴収することは、百姓の認識に基づいて国境を把握することを意味し、これが元禄国絵図

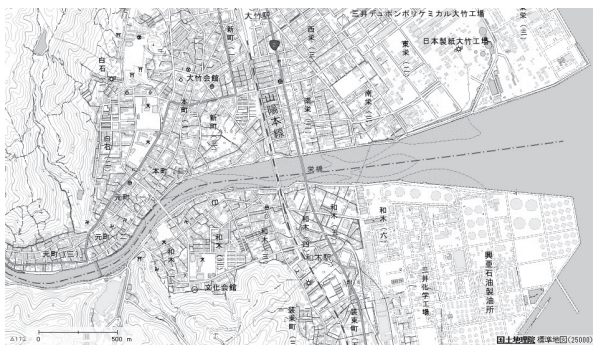


図 小瀬川河口付近（地理院地図 <http://portal.cyberjapan.jp/>）

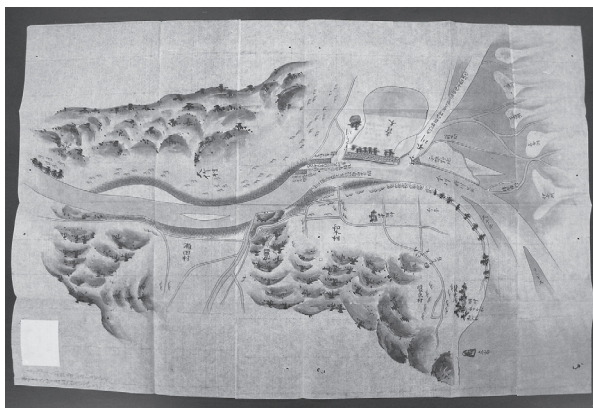


写真1 芸州境岩国和木村境目絵図（山口県文書館所蔵毛利家文庫58絵図268（12の2））

裏側に「西四月見分節樋口祥左衛門所持之分写置候 承応・貞享之際目宝永石垣共相見候分」との注記がある。酉年は享和元（1801）年。樋口祥左衛門は岩国藩（長州藩支藩）用人。

作成事業の特質として評価されている<sup>5)</sup>。

この百姓証文は在地にも控が残され、近世後期に発生した美濃国時山村と近江国五箇村の国境争論では、双方が証拠として利用し、その解釈をめぐり論争を繰り広げている<sup>6)</sup>。元禄国絵図作成事業により、国境秩序の規範が確立し、大きな画期がもたらされたのである。

ところで、百姓から直接証文が徴収された背景には、領主は転封するものであるが、百姓はその土地に居付いた存在である（「領主所替、百姓不易」）という当時の社会通念があった<sup>7)</sup>。これは、近世領主の領知権が、彼らに領知を宛て行った將軍による保留付きであったことを意味する。しかし、一口に近世領主と言っても、旗本や国持大名など様々な形態があり、領知権の強弱や性質も均一であったわけではない。したがって、元禄国絵図作成事業の実施過程も、各国の領主配置や地域の特質に応じてそれぞれ個性的なものとなる<sup>8)</sup>。「領主所替、百姓不易」の理念を重視する杉本の議論は、領主側の個性をあまり重視しないものと言えるが、こうした各国の個性的な事情も同事業の評価に際して正しく位置づけるべきではないだろうか。現在の研究水準に立って、各国における元禄国絵図作成事業の実施過程を洗い直す必要性が浮かび上がってくる<sup>9)</sup>。

そこで本稿では、長州藩における第二期元禄国絵図作成事業について分析を加えたい。長州藩における国絵図作成事業については川村博忠がすでに取り上げているが、それは第一期が中心で、第二期については「防長両国の加文国絵図引替献上は元禄十四年九月より翌十五年までの間であったと推定される」とするのみだからである<sup>10)</sup>。

## II 「御両国縁絵図覚書」の分析

まずは、川村博忠の仕事に依拠して、これまで明らかにされている長州藩での元禄国絵図作成事業実施過程についてまとめておく<sup>11)</sup>。

元禄10（1697）年閏2月4日、長州藩は江戸で長門・周防の国絵図改訂を拝命した。幕府から具体的な国絵図作成要領が提示された同年5月以降、藩庫に収蔵された正保国絵図の控を用いて正保以降の変動箇所を調査する一方、支藩に家屋数の調査を命じ、また国絵図改訂の責任者厚母四郎兵衛父子が支藩領内の実地調査を行った。

5月19日には正式な改訂基準とするため幕府に保

管されていた正保国絵図を借り受けて写し、8月に国元へ送付している。この写図が9月に到着すると国元で下絵図の調製が始まる。この間8月には伊予国の宇和島藩から瀬戸内海の離島の扱いについて問い合わせがあり、代官による調査を経て回答を行っている。

11月には概ね完成した下絵図を厚母四郎兵衛が江戸に持参し、幕府の指示を仰ぎつつ仕上げ作業に入った。それと並行して、隣接する安芸・石見の絵図担当藩役人と下絵図の国境部分を写した縁絵図を利用して国境部分の照合・調整が進められた。

元禄11年4月13日には幕府に下絵図を提出して確認を求め、そこでの指示に基づき修正した清絵図を幕府へ献上したのは元禄12年5月22日であった。

しかしその後12月になると、その時点で献上済みだった国絵図について、国境に関する注記を追加するよう幕府から要請され、長州藩では再び国絵図を作り直すことになった。元禄国絵図作成事業が第二期に移行したのであるが、長州藩におけるその対応について川村は詳しい分析を行っていない。

実は、山口県文書館に所蔵されている長州藩関係史料群のうち、元禄国絵図作成事業の関係史料でまとまっているものは、元禄10～12年、つまり第一期のものがほとんどである。川村博忠はこれらの史料を用いて第一期の同事業について詳しく分析したのであるが、その後同館における国絵図や長州藩絵図方に関する史料の整理が進み、川村が利用していなかった史料もまとめて把握することができるようになった<sup>12)</sup>。

そうした整理の中で紹介された史料のうち、第二期元禄国絵図作成事業に関するものに「御両国縁絵図覚書」<sup>13)</sup>がある。ここではこの史料を中心に分析を進める。

この史料は、1枚の紙袋によって2冊の簿冊が保管されているものである。紙袋の表には「元禄拾四年<sup>(開字)</sup>大公儀江御両国縁絵図於江戸国司正左衛門江被仰付被差上候絵図御控、於萩厚母三左衛門被仰付候覚書此袋之中ニ在之 平田四郎左衛門」と記されている。国司正左衛門は江戸留守居役、厚母三左衛門は先述の絵図方役人厚母四郎兵衛の嫡子で元禄12年に家督を継承していた。平田四郎左衛門は明和期の絵図方役人である。

簿冊の1点目は「覚」という表題を持ち、紙袋に記された通り元禄14年10月に幕府へ提出した周防・長門両国縁絵図の控を作成した際の記録（下書）である。元禄15年3月に厚母三左衛門が作成している。

2点目の表紙には「明和六丑ノ四月<sup>(より)</sup> 元禄拾武



(開字)  
年 公儀江御国絵図被差出候壺巻御控、此度急便を以江戸被差登候様ニ御道中申来候ニ付絵図方江沙汰有之候覚書 平田四郎左衛門」と書かれている。明和6(1769)年に幕府勘定奉行から元禄国絵図の控を提出するよう要請された際の記録(下書)であり、本稿の課題とは関係ないため、ここでは取り上げない。

「覚」の内容は、元禄13(1700)年10月に幕府の指示を受けて縁絵図が萩に送られてきたところから始まる。縁絵図を家老衆と厚母が閲覧すると、隣国へ続く道などの合間々々について、「いつれ方何れへ之出口道迄間山国境難相極」という国境小書が記されていた。厚母が、これでは後年国境争論が起き、幕府の裁許を受けることになった際に不都合だとして、「間山国境難書分」と書くべきだと進言すると、家老衆もそれを認め、厚母の案通りに隣国の役人衆と相談して縁絵図を調製するよう江戸へ指示することになった。

修正された縁絵図は隣国との取り交わしを経て元禄14年10月に幕府へ提出され、複製のため12月に控が萩に送られてくる。複製作業は翌15年正月より始められ、その記録つまり「覚」が提出された同年3月までに完了した。そして

- 一、周防・長門一国之切り之大絵図貳枚
- 一、周防・長門縁絵図拾壺枚
- 一、豊前之国与調被差越候縁絵図壺枚并小笠原殿家来与国司正左衛門へ之来状貳通
- 一、安芸国与調被差越候縁絵図壺枚
- 一、石見国与調被差越候縁絵図壺枚
- 但、亀井殿家来正判絵図也
- 一、周防国・長門国郷帳貳冊
- 一、周防国・長門国変地帳貳冊

が萩城の宝蔵に、また上記の絵図の写が江戸藩邸に保管された(写真2)。

この「覚」の内容で重要な点として、長州藩における第二期元禄国絵図作成事業が、冒頭の萩における協議を除きほぼ全て江戸において行われていることが挙げられる。「覚」の末尾に記された「覚」作成事情を引用すると、

右、公儀与御好出於江戸絵図調替被仰付、元禄拾四辛巳十月ニ被差出候絵図之控、委細之儀者於江戸国司正左衛門都合承ニ而調替相済候、いかやう之首尾ニ相済候哉一円正左衛門咄伝不承ニ付而、御好出し廉々爰元ニ而記録難調、都合御控出来調替之次第覚書如此御座候、以上

とある。幕府の指示に基づき修正され元禄14年10月に提出された絵図は、江戸において留守居国司正左衛

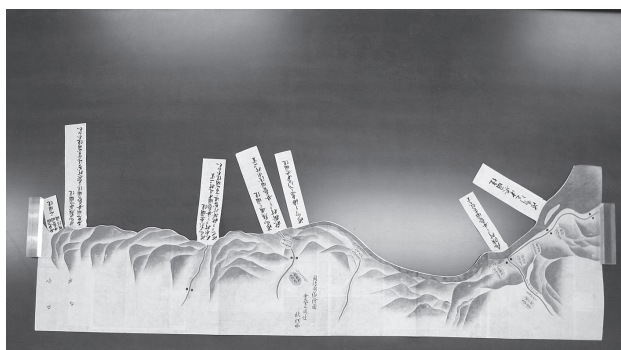


写真2-1 安芸国境周防国縁絵図(山口県文書館所蔵毛利家文庫58絵図264)

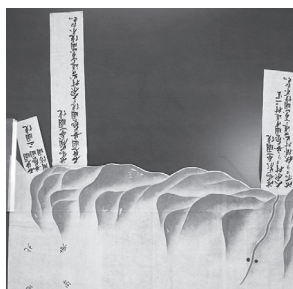


写真2-2 拡大図1  
付箋に「間山国境不相知」とある。

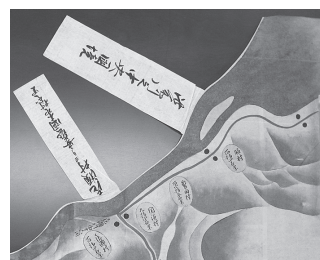


写真2-3 拡大図2  
小瀬川河口付近。

門が全て引き受けて調製を済ませ、その一部始終についての連絡も受けていないので、控図の作成に限って覚書を作成したことが述べられているのである。

控図作成作業に関する記述からも、江戸における縁絵図の修正作業が萩との連絡なしに進められたことがうかがえる。例えば、幕府に提出された縁絵図の国境小書には「此所ヨリ賀川村出口道迄間山国境不相知」と書かれていた<sup>14)</sup>。萩における協議で厚母が提案した「国境難書分」は結局採用されていなかったものであり、それについて厚母は「いかやう之首尾ニ而此分ニ書付相成候哉、調替之次第此方不申参様子不相聞」と不満気に記している。

また、「村名ニかなヲ付ケ候様ニと於江戸御沙汰有之、爰元江御沙汰なしニメ<sup>(して)</sup>かな付ケ被差出たると相聞得候」という記述もある。幕府から村名に仮名を付すよう指示があり、国元への連絡なしに仮名を付したことが述べられているが、そうして付された仮名には、「絵図方ニ覚申、又ハ地下ニ覚たると名相違仕候」つまり絵図方や村々で認識されている名称とは異なるものがあり、控図の作成にあたりその処理をどうするか厚母が家老に伺いを立てている。

このように、「覚」の分析からは長州藩における第二期元禄国絵図作成事業の実施はほぼ全て江戸留守居の裁量で進められた事実が判明する。そこで問題とな

るのが、百姓証文の徴収である。第二期事業の特徴の1つで、百姓の認識に基づく国境の把握という同事業の特質を示すとされたこの作業を行うためには、国元との連携が不可欠である。しかし長州藩の場合、国元との連絡がほとんどなされていないのであれば、百姓証文の徴収は行われなかったと見るのが自然である。

しかし、言うまでもなく「無い」ことを証明することは難しい。こじつけを言えば、単に厚母が「覚」に書かなかっただけで、実際には元禄13年12月から同14年10月の間に百姓証文が徴収され、厚母が「いかやう之首尾ニ相済候哉一円正左衛門咄伝不承」と述べた「調替」作業は、百姓証文徴収などの準備作業を除く、縁絵図そのものの調製作業のみを指している可能性も排除できない。そこで次に、百姓証文を作成する立場にある国境地域の視点から百姓証文徴収の有無を確認する。

### Ⅲ 小瀬川争論関係史料の分析

先述の通り、筆者がこれまで分析してきた美濃の国境争論では、元禄国絵図作成事業において作成された百姓証文が国境を示す証拠として解釈の対象となっていた。もし長州藩においても百姓証文が徴収されていたのであれば、元禄以降の国境争論において何らかの形で言及されるはずである。この点を、周防国と安芸国の国境を流れる小瀬川をめぐる紛争<sup>15)</sup>の史料から確かめよう。

元文元（1736）年、小瀬川河口の貝採場をめぐって和木村と大竹村の間で大規模な喧嘩が発生した<sup>16)</sup>。その際、岩国藩（長州藩支藩）が、和木村に隣接する装束浜の小十郎という老人に、以前よりの和木村と大竹村の交渉の経緯について尋ねている。小十郎はこの年86歳であるから、長州藩において第二期元禄国絵図作成事業が進行した元禄14（1701）年にはすでに51歳の壮年であった。また村役人も務めた「切者」であると評判の人物である。したがって、和木村・大竹村の紛争史を語るにあたり百姓証文についての言及があっても良さそうなものだが、そうした発言は見られない。

宝暦2（1752）年にも和木村と大竹村の間で、小瀬川河口にある砂州の川除普請をめぐり死者を出すほどの喧嘩が起きている（写真3）。その際岩国藩では、広島藩との交渉に備えて「古来より両村掛相且証拠も可相成趣御控之内相考、年代寄ニ相認」<sup>17)</sup>めた、つまり古くより和木・大竹両村間で起きた交渉事や境界の



写真3 小瀬川河畔に立つ三秀神社遺跡記念碑

宝暦2（1752年）に小瀬川河口の与惣野地をめぐる喧嘩で犠牲となった3名の百姓は、享和2（1802）年に紛争が解決したのち三秀神社に祀られた。2014年11月15日撮影。

証拠について考証して年代順に整理した留書を作成している<sup>18)</sup>。その元禄以降の部分を見ると、

元禄三年

一、与惣地ニ居候輩を打、双方論候事

一、十月朔日、寛永九年今井源右衛門築候大石垣鼻次致かけ候掛り相之事

元禄六年

一、大竹石垣之鼻築候ニ付、庄屋仁左衛門後之石垣之鼻ニおし出し候懸り相之事

元禄十一年

一、和木・大竹川除掛り相之事

一、六月瀬田之向大竹川へりニ八十間之杭を打、石せき仕候事

元禄十二年

一、瀬田道之者之前大川へり江五十間之杭を打、柵をかき、畠之かはい致し候事

右年数已後彼地懸り相之留書不相見

一、宝永三年青木ノ大石垣致候時一切懸り相無之由之事

一、享保廿一年大竹石船出入之掛り相

右之外者一切不相見候事

と書かれている。元禄13・14年には何の記述もなく、「右年数已後彼地懸り相之留書不相見」「右之外者一切不相見候事」とも記されている<sup>19)</sup>。藩当局によって小瀬川をめぐる紛争の記録や証拠が整理された際にも、百姓証文の存在を見出すことはできないのである。

小瀬川をめぐる紛争は、享和2（1802）年に河口の



分流を一筋にまとめる大工事が長州藩・広島藩の共同で行われたことにより最終的な解決を見る（写真4）。そこに至る交渉の過程で、支藩の岩国藩から提出された「和木村論地之場所往古々古実伝来之現書」について長州藩役人が議論している<sup>20)</sup>。彼らは「成程古キ物にて相違も無之様ニ相見候得共、芸州方役人駆合候而印形物之等現書者無之、地下申伝之書留或物喧嘩之度々使之者口上杯書記置候分にて、是を慥成証抛物与申ニ者難取用、行詰<sup>(平出)</sup>公裁等ニ相成候節、右現書を以申取可相成事与ハ相見兼候」と述べている。確かに古い書物ではあるが、安芸側の役人と交渉して作成した正式な書類はなく、村方の口承や喧嘩が起きた際に双方を往来した使者の口上などを書き留めたものに過ぎず、幕府法廷に持ち込まれた際の証拠となるようなものではないというわけである。またこの評議においては、広島藩役人の「昔方之書留物筆笥一棹有之候得共、証抛ニ相成物者何も無之、地下人共理屈能相認置候分にて、明り立不申、たとへて申ハ、人ニ銀ニ貸し、自分帳面ハ有之候得共、手形者無之様なるものにて、取得ニ不相成之由」という内々の発言が紹介されている。広島藩側でも古来よりの書物を保管しているが、いずれも村方が自らに都合良く書いたもので証拠にならないとのことである。特に、人に金を貸した時に自分の帳面には付けてあっても借用証文が無いようなものだ、という例えば、安芸・周防の双方で取り交わした書類が無いことを明示している。こうした状況からも、百姓証文が存在していないことを看取できるだろう。

## おわりに

以上の通り、長州藩における第二期元禄国絵図作成事業の実施過程において百姓証文が徴収されなかったことを、国絵図作成を担当した絵図方の史料と、後年の国境争論の史料という2つの視点から確認した。長州藩の同事業においては、百姓の認識に基づいて国境が把握されたわけではないのである<sup>21)</sup>。

同藩においてこうした特徴があらわれた背景には、国持大名という領主の性格や、絵図方という専門部局の存在などが考えられるが、拙速に結論づけることなく、他の地域についても国絵図作成過程を分析し、各事例を類型化していく中で明らかにすべきである。

また、国境証文の解釈を中心に展開した美濃・近江国境争論とは異なり、小瀬川をめぐる紛争では国境秩序の規範が確立せず、最終的に長州・広島両藩が共同



写真4 現在の小瀬川

大和橋より河口方向を望む。享和2（1802）年の普請により河道は1本化され、現在では埋立地に工業地帯が広がる。奥に見えるのは厳島。2014年11月15日撮影。

で大工事を実施し、土地そのものを改変することで根本的な解決を見る。両者の相違は、国境秩序を考える際には、元禄国絵図作成事業に画期を求める段階的な視点のみならず、領主や地域ごとの特徴に着目した類型的な視点も導入する必要があることを示している。

こうして、筆者が普段研究している地域とは別の地域について史料調査を実施することで、これまでの成果を相対化する視角を獲得することができた。このような機会を与えていただいた本プログラムに対し謝意を表して、本稿の結びとしたい。

## 謝辞

本稿作成にあたり、史料の閲覧・掲載について山口県文書館および岩国徴古館の皆様のご高配を賜った。また、史料の所在については名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期課程の山田裕輝氏にご教示を賜った。ここに記して篤くお礼申し上げる。

## 付記

本プロジェクトは、申請当初「日本近世の境界紛争と治水に関する史料調査と実地踏査」と題して、境界紛争（博論第1部に予定）と治水（同第2部に予定）について調査を実施する予定であった。しかし、調査の進展に伴い前者について追加調査の必要が生じたため、後者に充てるはずの予算をそちらに回し、本プロジェクトとして治水の調査を実施することはしなかった。そのため、報告の表題から治水を削除したことをお断りする。

## 注

- 1) 川村博忠『江戸幕府撰国絵図の研究』古今書院、1984年。
- 2) 杉本史子『領域支配の展開と近世』山川出版社、1999年。
- 3) 前掲杉本著書 p. 179。
- 4) なお「小書」とは、国絵図中に盛り込まれた国境に関する注記のことを指す。

- 5) 前掲杉本著書 p. 112。
- 6) 拙稿「近世の地域秩序と公儀」名古屋大学大学院文学研究科修士論文、2013年。同「近世後期の国境争論と元禄国絵図関連資料」名古屋大学大学院文学研究科研究指導認定論文、2014年。
- 7) 前掲杉本著書。
- 8) 前掲川村著書では、肥前国・周防国・長門国・陸奥国仙台領・筑前国・伊賀国における多様な国絵図作成の様子が紹介されている。特定の藩や地域に即した叙述としては、他にも渡邊秀一「対馬藩における元禄国絵図の作成過程」『文学部論集〈佛教大学〉』88, 2004年、阿部俊夫『近世ふくしまの国絵図』歴史春秋出版、2010年などがある。
- 9) 国ごとの個性に即して国絵図作成事業を考察することについては、磯永和貴も「個々の国絵図をめぐる政治的な問題を検討することによって、国絵図そのものの性格とともに地域的偏差、そして幕藩体制についても議論が深まるものと考えられる。」と述べ、課題として提起している（磯永和貴「国絵図研究の課題」『歴史地理学』52-1, 2010年）。
- 10) 前掲川村著書 p. 442。その後喜多祐子が、長州藩の国絵図再献上を元禄14年と明言するに至っているが、その過程について詳しく分析しているわけではない（国絵図研究会編『国絵図の世界』柏書房、2005年、p. 242）。
- 11) 前掲川村著書 pp. 428-442。
- 12) 河村克典「周防長門両国「国絵図」関係史料」『山口県文書館研究紀要』26, 1999年。山田稔「「諸役所控目録」にみる萩藩絵図方作製の絵図」『同』35, 2008年。同「萩藩絵図方関係年表」『同』38, 2011年。同「萩藩絵図方関係年表（図版編）」『同』39, 2012年。
- 13) 山口県文書館所蔵一般郷土資料・袋入絵図15。
- 14) 「山国境不相知」という文言については、前掲杉本著書参照。
- 15) 和木町史編纂委員会編『和木町史』和木町、2003年。
- 16) 「享保廿年和木大竹掛合之事 元文元年貝取場喧嘩一途共」（岩国徴古館所蔵吉川家寄贈藩政資料1115000011）。
- 17) 「和木大竹掛合之記 惣目録」（岩国徴古館所蔵吉川家寄贈藩政資料1115000013）。
- 18) 「和木大竹掛合之記 御密用 八」（岩国徴古館所蔵吉川家寄贈藩政資料1115000013）。
- 19) 「右年数已後彼地懸り相之覚書不相見」の後に宝永3年と享保21年の記述が出てくると、年次を本文中に書くか否かといった文体の相違を考慮すれば、最後の2ヶ条は後で追加された補遺分と推測される。
- 20) 「周防脇村安芸大竹村御境論記録 三」享和元年10月18日条（山口県文書館所蔵毛利家文庫30地誌25（10の4））。
- 21) ここで改めて先行研究を確認してみると、磯永和貴は百姓証文の徴収について「現地の豊民からの国境の位置を記した同意書を提出させた場合も見られた」と慎重な記述をしている（前掲国絵図研究会編著 p. 330）。しかしこれ以降にも、「当地に住む百姓の判形をもった国境証文を取りはじめ、絵図内に国境小書を付すことも求め、国境を確認していくことになった」（金田章裕・上杉和央『日本地図史』吉川弘文館、2012年、p. 95）と、百姓証文の徴収について特に限定を付さずに記述する研究が見られ、研究者間で共通の認識が確立されていないことがわかる。今後検討していくべき問題と言えよう。